

## 第3回(2010年12月22日)

### 1. 実施要領

日時 2010年12月22日(水) 午後5時~6時20分

場所 大学院国際文化科学研究科E棟4階 学術交流ルーム

報告 寺尾智史「ミランダ語と映画『日本からミランダの大地へ』——フィールドワーカーがインフォーマントに映像として料理される位相」

### 2. 報告(上映者=出演者=解説者としてのコメント)

#### ミランダ語と映画『日本からミランダの大地へ』 ——フィールドワーカーがインフォーマントに映像として料理される位相

「サバルタン」ということばがある。そのことばは、「語ることができるか」という命題とともに、調査者から「語られる」ことが多い。

私には、1994年年末から現在までフィールドとしている、ミランダ・ド・ドウロ、という場所がある。ポルトガル北東部、直訳すれば「山々の裏側」の意のトラズ=ウズ=モンテス地方の東端、スペインとの国境にある辺境地帯である。そこでは、ミランダ語というロマンス諸語の一つのことばが話されている。17世紀にはセルバンテスの『ドンキホーテ』の中で、イベリア半島で一番粗野な訛りとして嘲りの対象にされたことばであるが、1999年に「ミランダ言語法」が成立し、国家から保全の対象として認知された。

ここは、ポルトガルにおいて1974年までの約半世紀支配した独裁政治のせいで、つい最近まで、識字率が非常に低かった。ヨーロッパの中でも最もサバルタンの度合いが高い場所である。すなわち、サバルタンとは、社会の底辺でリテラシーから隔離された状況に置かれ、自分自身の考えを表現、表明することが困難な人々を指すことばである。

しかし、近年の映像記録機器の革新は、そうしたサバルタン状態を劇的に変えつつある。文字による表現が億劫な人間でも、メディアを使って、自分自身を、そして他者を、他人の力を借りずに直接表現できるようになったのだ。

こうした時代になると、今まで、ともすれば、調査者による、インフォーマント、調査対象者への、一方的なまなざし、というフィールドワークの虚構が崩れ去る。そして、一挙に、調査には、必ず双方向の対話がともなっており、そこには、調査者が見つめるまなざしと同等の、いや、たいていの場合、よそ者に違いない調査者への、より強いまなざしが存在していたことに気付くのである。

そのことに、否応なく気付かされたひとりが、私自身である。

2005年春、調査に入ってから10年目になったその時、私は、ミランダの人々から呼び出された。「おまえの映画を撮るから」と。

最初は、「その柄でない」、と断った。それが無駄な抵抗だとわかると、今度は、現地のことば、

ミランダ語を特訓すればしゃべれるようになりそうな東洋人の役者を探した。しかし、彼らの気持ちは最初から固まっていた。「ここに懲りずにやってくるおまえが出ないと意味がない。」と。

結局、映画の構成、そして台本に至るまで、普段は私から見つめられている、ミランダの人々のアレンジに身を任せた。もちろん、明らかにおかしい、と思ったところは、意見した。しかし、私を見つめている彼らと、ぎこちなく彼らに見つめられている私に、これまで味わったことのない、ふしぎな調和と連帯感が生まれているのを感じるようになった。

きっと、私は、心の奥底で、私の調査報告に目を通す都会の第三者からより、インフォーマント自身からじかに評価されることを望んでいたのだ。

こうして、インフォーマントによって映画にされ、評価された調査者である私は、願いがなかった、幸福な調査者となったのである。

その後、この映画の発意者のひとりであるミランダ出身の映画プロデューサーすでにミランダを舞台にした映画を監督したことのあるレオネル・ビエイラ Leonel Vieira による調整の結果、フィルム技術的製作については、彼の友人であるマドリッドから来た若手の映画監督が行うことになった。

さて、この映画の制作は、ミランダの地域品種である優良牛で、映画にも何度も登場するミランダ牛の歩みのように、非常にゆっくりとしたペースで、動いたり止まったりを繰り返しながら進んだ。ミランダの人々の名誉のためにいっておくと、それは主に監督側の編集作業の遅滞によるものである。

2005年には、ミランダでの撮影を元に予告編が作成されたが、「日本からミランダの大地へ」という題名に欠かせぬ、日本側での撮影は2008年にずれ込んだ。日本にもミランダと似た風習があること、日本でもミランダ語のことが紹介されていることなどが描かれたが、この部分については、ミランダの人々の構成をベースにしながらも、ミランダのコミュニティに属さない制作者の裁量がより大きく反映され、イベリア半島人一般の日本文化へのステレオタイプが投影されており、ミランダの情景と比べて、雑味が多く、個人的には見劣りするくらいがあったように思う。

ともかく2009年、ようやく完成してポルトガルの旧国営テレビ局の RTP によって本作品が放映されると、ミランダ語で書かれているブログで好評価をされるなど、ミランダの人々に好意的に受け止められたようである。

以上のとおり、この映画については、主に構成までがミランダの人々の手によって、その後の制作は一部コミュニティ外の人間の手を経た。しかし、日々進化するメディアの発展によって、今後、ミランダの農村に日々暮らす人々がすべてを彼らの手で作品化することも充分可能であろう。これから、世界のどんな場所に行こうとも、調査者は、被調査者によって評価されていことを、彼らのあやつるメディアによって、まざまざと見せつけられるであろう。私の回りを見てみると、以前の自分自身を含め、それを嫌がる調査者が多い。しかし、調査対象との対話のない調査ほど、虚ろな机上の空論はない。私はそう思っている。

本稿は本映画の完成前に書いた拙稿「映画にされた調査者の告白」(『アクション別フィールドワーク入門』社会思想社、2008年、108-109ページに所収)を全面的に書き直したものである。